
ギルド

翠時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギルド

【Nコード】

N3801BA

【作者名】

翠時

【あらすじ】

天使界最大の王都「ジェラン」。この地を夢見て地方から上京してきた学生天使シユウだったが、王国認定ギルドの認定試験でいい結果が残せず、下位職である「人間」という職業に就く。そんな中、ある人間の少女に出会い、人間という職業に魅力を見出し始めるが……

更新も遅く、文章もひどいですが、いい作品になるように頑張りますので、よろしくお願ひします。

また誤字脱字、文法上不自然な点などありましたら感想フォームなど
どで指摘いただけたら幸いです。

1 「人間」 (前書き)

注意

この物語はフィクションです。

登場する名前、団体等は、実在するものと一切関係ありません。

1 「人間」

正面にそびえ立つ大きな城、その目の前に広がる大きな広場、その中央に位置する大きな噴水と、取り囲むように配置された様々な施設や店舗。

これらを見て、ここが天使界最大の王都「ジエラン」であることに気付かぬものは1人としていないだろう。

各地方からこの地を夢見て訪れ、夢半ばでこの地を去る学生天使も決して少なくない。

無論、この地で成功を治めるということは誰もの夢であり、また、天使としての最大の名誉でもある。

『番号札89番の方、いらっしやいましたらギルド4番窓口までお越し下さい。』

そんな僕も、まさにこの地を夢見てここに立つ学生天使だ。地方では頭1つ2つ突出した才能を持っていたと自負しているが、ここは自分のような天使が多く集まる場所。自分のレベルがどこまで達しているかなど、まったくもって目星が立たない。

そこで、目安とされるのが、王国公認ギルドの認定試験である。仕事を得るにはこの試験は避けて通れないし、何より自分のレベルが明確に判断されるので、学生はこの地に来たらまずその試験を受けるというのが基本になっているのだ。

そして、つい先日、僕もその認定試験を受けた。

この試験でA〜Fクラスの6クラス+最高位であるSクラスの全7位に区分される。(と言っても、Cクラス以上は昇格する他はほぼ不可能と言われているが…)

ちなみに、一般的にはA Bが上位、C Dが標準位、E Fが下位と表現される。

そして、それに応じて職業と仕事が与えられるという仕組みだ。今はまさにその結果を受け取る場所である。

「89番です。お願いします。」

4番窓口に着くとすぐに僕は番号札を出し、結果発表を待った。学生なら標準位、つまりDクラスに引っかければ十分とされる。願わくば標準位に…

「はい、シヨウさんですね。結果は…」

窓口の女性天使が書類を手に取り、目を通す。

「Fクラスです。」

Fクラス。

試験評価書に書かれたその文字を何度見直しただろうか。

昼前、この紙を受け取る前は夢と希望に満ちていた自分。その自分がどうして今、こうして宿舍の窓から宇宙を眺め、自分の将来を案じなくてはならないのだろうか。

「シヨウくん！入るよ！」

ドアの方から誰かの声。この声はスノヨだろう。幼なじみではな

いが、長い付き合いの同級生だ。

「あれ？元気がないね？ いつもなら『部屋は入るときはノックくらいしろー！』って殴りかかってくるのに。」

嫌に高いテンションで話す彼女。

彼女もまた、僕と同じくこの地を訪れた学生天使だ。

まさに才色兼備とは彼女のこと、成績は常にトップであったし、首元が隠れるか隠れないかぐらいの茶髪のショートヘアに白い肌、澄んだ青い瞳、そしてなにより誰にでもフレンドリーに振舞う彼女に勘違いする男は後を絶たない。結果として、ここ1年間で10回は告白されたらしい。しかし、そんな彼女だが恋愛というものには全く興味がならしく、それに関しては約幼馴染としてはおせっかいながら心配しているところでもある。

「ああ、まあな……」

彼女のテンションに対し、自分はというとむしろま逆のテンションで応答する。

察しのいい、というより人並に『感情解析』ができる彼女は、自分の反応を見ると、大体分かったと言わんばかりの表情を浮かべた。

「あ、どうせテストの結果が悪かったんでしょ。でもシヨウくんだったら落ちはしなかったよね？」

そう言う彼女はなぜか少し悲しそうな顔をしている。

ちなみに、落ちる…それはつまり、Fクラスにも満たないということ、『夢半ばでこの地を去る学生天使』が主にこれに該当する。もちろん、自分がそれでなかったことは誇るべきだったかもしれない。

ない。

しかし、悲しい現実ではあるのだが、初めFクラスだった天使が、後に偉大な業績を残したなんて話は聞いたことはない。

「まあ、落ちてはいないんだけど…最下位クラスだったんだ。」

「ああ、それは残念だったね。」

慰めるように言う彼女。だんだんと部屋全体の空気も重くなってきているのが身にしみて感じる。

「……………」

「……………」

長い沈黙が流れる。気づけば彼女は自分の隣に座っていた。

「…わるい。1人にしてもらっていい??」

「あ…ごめん。」

そんな状況で、自分でも想像していなかったそんな台詞を発すると、2人の間にはさらに気まずい雰囲気 flowed。

隣に座っていた彼女は俯きながら立ち上がる。

「…じゃあ、また明日ね。」

そんな不束者の僕であつたにもかかわらず、彼女はにっこりと笑ってくれた。

ボタンとドアの閉まる音が部屋に鳴り響く。

明日、謝ろう。

そう考えつつ、評価書に目を戻した。

「シヨウくん!」

遠くから自分の名を呼ぶ声。こんなことをするのはスンヨくらいだ。

「スンヨ?」

振り返る。向こうから駆けてくる女の子は…紛れもなくスンヨだ。きれいに手入れされたショートヘアが跳ねるように揺れる。

「はあ…はあ…昨日はごめんね。急に押し掛けちゃって。」

息を切らしながら謝る彼女。悪いのが全面的に自分だけに心が痛い。

「ごめん。昨日は完全に僕が悪かった。こっちこそ、ごめん。」

誠心誠意で謝る。

すると、彼女は昨日よりも満面の笑みを浮かべて笑い、僕もそれにつられて精一杯の笑顔を見せた。

この時2人の間には、そこら辺でベタベタしているカップルより

も清く、強い愛情が生まれた。

…なんてことは、まるでない。

「今から職業選択??」

「うん。やっぱりFクラスに受かっただけでもいいと思うことにして、最善を尽くすことにしたよ。」

悩みに悩んだ結果、昨日はこの結論に至った。

「へえ、シヨウくんらしくないね。普段なら負の連鎖で、体中の活力が全部抜けたよぼよぼの老天使みたいになるのに。」

「いや、それは言いすぎだ。確かに負の連鎖には陥るけど…」

事実、今まで負の連鎖に陥り、抜け出せなくなることはしばしばあったし、昨日も実質的に陥りかけていた。

しかし、この地に来てみると、そんなことでくよくよしている暇はないということに気付かされる。

さっきだって、泣いて帰路に着く学生天使を見た。彼らから見れば、Fクラスだって立派であり、夢なのだ。

「じゃあ、行こうよ。EFクラス受付は向こうだったかな。」

そう言ってスンヨは受付の方へと歩きだす。

それに、いざ聞いてみると彼女もFクラスだったので、昨日までの悩みも少し軽減された。

しばらく歩くと『EFクラス就職・転職受付』という文字と受付の女性天使が見えてきた。それにしても、入り口からかれこれ1分は歩いた。どれだけ広い施設なのだろうか。

「あの、就職したいのですが…」

「はい。就職志望ですね？ 試験評価書をご提出ください。」

言われるがままに評価書を提出する。昨日躍起になって少しくしゃくしゃにしてしまった事は秘密だ。

「少々お待ちください。」

女性天使が何やら作業を始める。

ふと横に顔を向けると隣でスンヨが受け付けをしていた。

つと、ここで不意に彼女がこちらを振り向いた。

僕はあわてて顔を戻す。が、気になってもう一度彼女の方を見る。すると今度は彼女がすぐに顔を正面に戻す。少しではあったが、彼女のほほは赤くなっていた気がした。

「お待たせしました。」

と、ここで女性天使の声が聞こえる。あわてて返事をする、隣から小さく笑う声が聞こえた。

「現在のあなたのクラスですと、これらの職業が選択できます。」
そう言いながら、一枚の用紙が手渡される。用紙には「トラベラ

「I (A)」、「雑用 (A)」、「昆虫 (E)」、「人間 (E)」と書いてあった。なぜだか「人間 (E)」にアンダーラインが引いてある。

「Aは天使界での職業、Eはアースという太陽系の惑星での職業です。アンダーラインはテスト結果から推定した、最も適性の高いと思われる職業です。」

とりあえず、雑用というのは真っ先に選択肢から消えるとして、残りは3つ。

どうせアースというところで働くなら適性の高い方がいいので、最終的には「トラベラー」か「人間」の二択になるのだろう。

「人間」というのは全く聞かない職業だが、「トラベラー」はFクラスの職業のわりには有名だ。

しかし、逆に「トラベラー」という職業はFクラスと感付かれるのもなんだか性に障る。

そんなこんなで、かれこれと悩みに悩んだ結果、適性に従い「人間」という職業にした。

こうして「人間」としての新たな生活が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3801ba/>

ギルド

2012年1月9日22時52分発行